油井先生を送る

2006年3月末をもって、アメリカ太平洋地域研究センター教授である油井大三郎先生が東京大学をご退職されることとなりました。センターの同僚や後輩にとりましても、これは歴史的な節目となる出来事であり、『アメリカ太平洋研究』本号を油井教授ご退職特集とすることも検討いたしましたが、先生のご意向もあって、以下にご自身がまとめられた年譜とご業績のリストを掲載させていただくことにいたしました。

多くの方々がご存知のとおり、油井教授は一橋大学から駒場に移られた1996年より、一貫して当センターの発展のために八面六臂の活躍をされ、今日のアメリカ太平洋地域研究センターの開祖として、組織面、研究活動の中枢を担ってこられました。先生がセンターおよび東京大学にとって如何に圧倒的な存在でいらしたかは、この年譜と業績リストが何よりも雄弁にものがたっています。センター関係者を代表して、油井先生のご尽力と指導力に深謝し、今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。

東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター長
能登路　雅　子

◆油井大三郎先生　年譜

1945年12月2日	神奈川県鎌倉市材木座で海軍技術将校だった父、油井一と母、百合子の三男として生まれる。非軍事化で父失職のため母の実家があった東京都世田谷区北沢にほどなく移転、祖父、鈴木義男、祖母、ときわの下で中学2年ごろまで同地で育つ。
1952年4月1日	東京都世田谷区立北沢小学校入学。
1958年3月31日	同校卒業。
1958年4月1日	私立麻布学園中学校入学。 中学3年次より山岳部に所属、高校3年の5月まで活動。八ケ岳、北アルプスなどを山行。中学3年次の社会科レポートでルネサンスを調べるため日比谷図書館に通う中、1960年日米安保条約改定で揺れる国会議事堂周辺を目撃。

1961年３月31日	同中学校卒業。
1961年４月１日	同校高等学校進学。
1964年３月31日	同校卒業。
1964年４月１日	東京大学教養学部文科Ｉ類入学。 当時の駒場キャンパスは日韓条約、ベトナム戦争で揺れる。
1965年８月	合唱団柏葉会のキャラバンで長野県の開拓村訪問を機に教養学科進学を決意。
1966年10月１日	同学部教養学科国際関係論分科進学。江口朴郎、斉藤孝、宇高基輔先生のゼミで現代史研究の薫陶うける。
1967年11月	ベトナム戦争の影響で南北問題に関心もち、駒場祭で共同研究冊子『南北問題と新植民地主義』を発表、ベトナム の土地改革について書く。
1968年３月31日	同学部卒業。 卒業論文は「修正主義論争をめぐる一考察」。
1968年４月１日	東京大学大学院社会学研究科国際関係論専門課程修士課程入学。 ６月より医学部問題で全学ストライキとなり、指導教官の複数化や総合ゼミの制度化を求める一方、自主ゼミなどで研究を継続。
1970年２月	首都圏の院生とアメリカ研究若手研究会を始める。
1970年３月31日	修士課程修了。修士論文「武器貸与法と孤立主義の終焉」提出。 その一部を『歴史学研究』1972年８月号に発表。
1970年４月１日	同研究科博士課程進学。
1970年７月24日	教養学科時代の友人、玉置光恵と結婚。返還前の沖縄へ旅行。
1971年８月	現代史サマーセミナーでアメリカ若手研究会現代史グループとして冷戦の起源について報告。『歴史学研究』1972年７月号に掲載。
1973年４月	神奈川大学経済学部「世界経済論」非常勤講師
1973年５月	日本西洋史学会第23回大会で「第二次世界大戦とアメリカにおけるグローバリズムの確立」について報告。
1973年７月-10月	全米諸学会評議会（ACLS）のプレドクトラル・フェローとして米国で冷戦起源史について短期調査。トルーマン大統領図書館、国立文書館などで調査。石油危機の発生時に帰国。
1974年３月31日	同研究科博士課程単位取得退学。
1974年４月１日	明治大学文学部専任講師。
1974年５月	歴史学研究会大会現代史部会で「帝国主義世界体制の再編と冷戦の起源」について報告。
1975年７月	アメリカ史研究会の創設に参加。
1975年12月	駿台史学会大会で「合衆国における地域研究と地域概念の史的検討」を発表。
1976年４月-９月	一橋大学社会学部非常勤講師。
1976年５月-78年５月	歴史学研究会委員。77年大会で「民族と国家」の企画に関与。こ

	の頃、長女の通う世田谷区立烏山保育園関連の住民運動に関わり、1978年12月『住民参加行政の光と陰』（亜紀書房）刊。
1979年 4 月 1 日	明治大学文学部助教授となる。
1979年 5 月-80年 2 月	一橋大学経済研究所非常勤講師。
1979年 8 月	アメリカ史研究者夏期セミナーで「帝国論と帝国主義論」について報告。
1980年 4 月 1 日	一橋大学社会学部助教授に移籍。新設の「現代社会総論」担当。
1980年 8 月	第15回国際歴史学会議出席のためルーマニアほか、バルカン諸国で調査。
1981年 5 月-83年 5 月	歴史学研究会委員、総合部会担当として社会史と民衆運動史を架橋する全体会テーマの企画に関わる。
1982年 4 月-83年 3 月	明治大学文学部非常勤講師。
1982年 9 月-83年12月	日本学術会議平和問題研究連絡委員会専門委員。
1983年10月-84年 3 月	東京大学教養学部教養学科アメリカ分科非常勤講師。
1984年 7 月-86年 7 月	全米諸学会評議会（ACLS）招聘により米国カリフォルニア大学バークレー校で在外研究。その成果を1989年に『未完の占領改革』として刊行。
1985年 5 月	一橋大学大学院社会学研究科より『戦後世界秩序の形成』に対して社会学博士号授与。同時にアジア系移民史への関心始まる。
1986年 4 月	カリフォルニア大学バークレー校日本研究センターで日本占領期についての “Democracy from the Ruins” 報告。
1987年 9 月	一橋大学社会学部教授となる。
1987年 4 月-88年 3 月	茨城大学人文学部非常勤講師。
1987年10月-89年 3 月	東京大学教養学部教養学科アメリカ分科非常勤講師。
1988年 4 月-90年 3 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員。
1988年12月-89年 3 月	名古屋大学大学院法学研究科非常勤講師。
1989年 2 月	東京大学出版会の「新しい世界史」シリーズの一環として『未完の占領改革』刊行。翌年10月毎日新聞社・アジア調査会のアジア太平洋特別賞受賞。
1989年 4 月-93年 3 月	東京女子大学文理学部非常勤講師。
1989年 4 月-10月	京都大学大学院文学研究科非常勤講師。
1989年 6 月-93年 6 月	アメリカ学会編集委員、90年からは副編集委員長。
1989年10月	韓国アメリカ学会年次大会でコメント。
1991年11月29日	『朝日』論談に「開戦50周年に反省の表明を」を執筆、英訳され、欧米に紹介。*Financial Times, Pacific Stars & Stripes, National Public Radio* などの取材うける。
1991年12月	太平洋戦争開戦50周年の関連で戦後補償求める市民運動に関わり、雑誌『世界』に「ポスト・パールハーバーの歴史心理」発表、各紙の論壇時評などに取り上げられる。
1992年 2 月	戦争責任・戦後補償問題研究会の発足に関わり、各紙「ひと」欄

	で報道。
1992年４月13日	NHK 国際放送の解説番組で「戦後補償」について発言、20カ国語に訳され、放送される。
1992年９月	NIRA 研究グループ「日米関係におけるエスニックな要素」のシアトル会議で中国系移民排斥法の撤廃過程について報告。
1992年４月-９月	東京大学教養学部非常勤講師。
1992年12月-94年12月	一橋大学学生部長。小平と国立のキャンパス統合に関与。
1995年４月-５月	文部省短期派遣によりワシントン DC で在外研修。『日米・戦争観の相克』脱稿。
1995年７月	敗戦50周年国際平和アピール日本委員会に参加、日・英・中・韓の４カ国語で平和アピール発表。
1995年10月-96年３月	安部フェローシップによりカリフォルニア大学バークレー校で在外研修。日系移民の再定住研究に従事。この間、ハイデルベルグ大、米国アメリカ学会（ASA)、スタンフォード大学等で敗戦50年関連の報告。
1996年４月１日	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻教授に配置換え。1996年度は一橋大学社会学部併任。
1997年６月-	アメリカ学会常務理事。2002-3年副会長。
1997年４月-01年３月	東京女子大学文理学部非常勤講師。
1997年	東京大学教養学部付属アメリカ研究資料センター創設30周年記念でシンポジウムや式典開催。シンポジウムの成果を『多文化主義のアメリカ』として1999年に刊行。
1998年４月-02年３月	文部省科学研究費補助金・特定領域 B「アジア太平洋地域の構造変動における米国の位置と役割に関する総合的研究」を領域代表として推進。成果を彩流社から『変貌するアメリカ太平洋世界』（全６巻）として2004-5年に刊行。
1998年４月-99年３月	広島大学大学院社会科学研究科非常勤講師。
1998年６月-99年３月	名古屋大学大学院法学研究科非常勤講師。
2000年４月１日	東京大学大学院総合文化研究科付属アメリカ研究資料センターのアメリカ太平洋地域研究センターへの改組実現、同センター教授に配置換えかつ同センター長に就任（-2005年３月)。
2000年５月-04年３月	大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員。
2003年４月-	放送大学客員教授
2003年７月	地域研究学会連絡協議会が結成され、事務局長（-2005年11月)。
2004年６月	アメリカ学会会長（-2006年６月)。
2005年10月	日本学術会議会員（６年任期)、地域研究委員会委員長に選出。

◆　油井大三郎　業績一覧

A.　単著・編著

1985年	『戦後世界秩序の形成―アメリカ資本主義と東地中海地域、1944-1947』東京大学出版会
1989年	『未完の占領改革―アメリカ知識人と捨てられた日本民主化構想』（新しい世界史シリーズ第11巻）東京大学出版会（毎日新聞社・アジア調査会第 2 回アジア太平洋特別賞授賞）
1989年	「19世紀後半期のサンフランシスコ社会と中国人排斥運動」伊藤定良、木畑洋一、松野妙子、油井大三郎編著『世紀転換期の世界―帝国主義支配の重層構造』未来社
1993年11月	小菅信子・油井大三郎『連合国捕虜虐待と戦後責任』（岩波ブックレット）
1994年	「米国の戦後世界構想とアジア」豊下楢彦、中村政則、油井大三郎編『占領改革の国際比較―日本・アジア・ヨーロッパ』三省堂
1995年	『日米・戦争観の相剋―摩擦の深層心理』岩波書店
1997年	「世界史の中の戦争と平和」『岩波講座世界歴史』第25巻、岩波書店
1998年	古田元夫、油井大三郎『世界の歴史28、第二次世界大戦から米ソ対立へ』中央公論社
1999年	「いま、何故多文化主義論争なのか」油井大三郎、遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ』東京大学出版会
2001年	Daizaburo Yui and Yasuo Endo eds., *Framing the Pacific in the 21st Century: Coexistence and Friction*, Center for Pacific and American Studies, The University of Tokyo
2003年	「アメリカの世紀はどう創られたのか」有賀夏紀、油井大三郎編『アメリカの歴史』有斐閣
2003年	油井大三郎、遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』東京大学出版会
2003年	五十嵐武士、油井大三郎編『アメリカ研究入門―第3版』東京大学出版会
2003年	Laura Hein and Daizaburo Yui eds., *Crossed Memories: Perspectives on 9/11 and American Power*, Center for Pacific and American Studies, The University of Tokyo
2004年	「太平洋共同体の可能性」遠藤泰生、油井大三郎編『太平洋世界の中のアメリカ』（『変貌するアメリカ太平洋世界』第1巻）、彩流社
2004年	油井大三郎編『新訂アメリカの歴史』放送大学教育振興会
2005年	「世界戦争の中のアジア・太平洋戦争」倉沢愛子、杉原達、成田龍一、テッサ・モーリス・スズキ、油井大三郎、吉田裕編『岩波講座アジア・太平洋戦争』岩波書店

2006年　Daizaburo Yui ed., *The World of Transnational Asian Americans*, Center for Pacific and American Studies, The University of Tokyo

B. 単行本収録論文

1975年　「1945年英米金融・通商協定と現代帝国主義の矛盾」古川哲・南克巳共編『帝国主義の研究』日本評論社
1976年　「戦後世界とアメリカ―冷戦史の再検討」本間長世編『総合研究アメリカ』第７巻、研究社
1978年　「ドキュメント烏山北保育園紛争」五十嵐敬喜、柏木暁、小山毅編『住民参加行政の光と陰』亜紀書房
1979年　「アメリカ国際政治史」日本国際政治学会編『戦後日本の国際政治学』有斐閣
1980年　「帝国主義成立期の資本輸入と資本輸出」鈴木圭介編『アメリカ独占資本主義』弘文堂
1985年　「朝鮮戦争と片面講和」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史・現代１』 東京大学出版会
1985年　「転換期の現代世界と社会変革」庄司興吉編『転換期の社会理論』垣内書店
1988年　「対外投資」「対外貿易」鈴木圭介編『アメリカ経済史 II』東京大学出版会
1988年　“American International Relations,” Sadao Asada ed., *International Studies in Japan: Biographical Guide*, The Japan Association of International Relations
1989年　「人種差別と民衆意識」本田創造編『アメリカ社会史の世界』三省堂
1990年　「占領政治の政治力学」歴史学研究会編『日本同時代史』第１巻、青木書店
1990年　「ベトナム戦争と帝国意識」荒井信一ほか編『現代史における戦争責任』青木書店
1991年　「転換期の世界と日本」歴史学研究会編『日本同時代史』第５巻、青木書店
1991年　「主体的歴史学の形成」斉藤孝ほか編『思索する歴史家・江口朴郎』青木書店
1991年　「日米経済摩擦の歴史心理―相互イメージの曖昧さをめぐって」明治大学人文科学研究所編『曖昧』風間書房
1991年　「アメリカ」土井正興・浜林正夫編『戦後世界史』上、大月書店 序章―1、第５章―1「転換期の世界と南北アメリカ」歴史学研究会編
1993年　『南北アメリカの500年』第５巻、青木書店
1993年　「パクス・アメリカーナの時代」有賀貞ほか編『詳説アメリカ史』第２巻、山川出版社

1994年 「米国における国民統合とアジア系移民」歴史学研究会編『国民国家を問う』、青木書店

1995年 「第二次世界大戦とアジア系移民差別法の廃止過程」有賀貞編『日米関係におけるエスニシティ』総合研究開発機構

1995年 「朝鮮戦争」『岩波講座日本通史』第19巻、岩波書店

1996年 「冷戦における対立と妥協」歴史学研究会編『講座世界史』第 9 巻、東京大学出版会

1996年 「戦争の記憶と日米ギャップ」山内昌之、古田元夫編『日本イメージの交錯』東京大学出版会

1996年 「スミソニアン原爆展示論争と国境の壁」長崎の証言の会編『証言1996・ヒロシマ・ナガサキの声』第10集

1997年 "Between Pearl Harbor and Hiroshima/Nagasaki: Nationalism and Memory in Japan and the United States," Laura Hein and Mark Selden eds., *Living with the Bomb: American and Japanese Cultural Conflicts in the Nuclear Age*, M.E. Sharpe

1997年 「悲劇の証言者」義江彰夫、山内昌之、本村凌二編『歴史の文法』東京大学出版会

1997年 「パール・ハーバーとヒロシマ・ナガサキの間」早稲田大学社会科学研究所編『現代日本の歴史環境』

1998年 「アメリカ外交とエスニシティ」有賀貞、宮里政玄編『概説アメリカ外交史』有斐閣

1998年 「戦争の記憶と歴史の壁」義江彰夫、山内昌之、本村凌二編『歴史の対位法』東京大学出版会

1998年 「アジア系移民の排除と統合」増谷英樹、伊藤定良編『越境する文化と国民統合』東京大学出版会

1999年 木村靖二・油井大三郎「ヨーロッパ近代の崩壊」、「現代世界の中の西洋」近藤和彦編『西洋世界の歴史』山川出版社

2000年 「日系アメリカ人の再定住とカリフォルニア社会」五十嵐武士編『アメリカの多民族体制』、東京大学出版会

2002年 「21世紀の歴史意識―混迷か、転換か」史学会編『歴史学の最前線』山川出版社

2002年 「アメリカン・ヘゲモニー論への疑問」松田武・秋田茂編『ヘゲモニー国家と世界システム』山川出版社

2003年 「非同盟主義との遭遇」秋田茂、水島司編『現代南アジア 6 』東京大学出版会

2003年 「米国のナショナル・アイデンティティと戦争の記憶」中谷猛ほか編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』晃陽書房

2003年 「覇権国アメリカの戦争観と日米関係」同時代史学会編『戦争と平和の同時代史』日本経済評論社

2003年 「アメリカの独占資本」二谷貞夫ほか編『忙しい現代人のためのもの

	がたり―世界史』一橋出版
2004年	「世界史認識と平和」藤原修、岡本三夫編『いま平和とは何か』法律文化社
2005年	「日米関係の現在と未来」東京大学教養学部編『16歳からの東大冒険講座』第 2 巻、培風館

C. 学位論文

1970年	修士論文「武器貸与政策と孤立主義の終焉」東京大学大学院社会学研究科国際関係論課程
1985年	博士論文「戦後世界秩序の発生史的研究」一橋大学大学院社会学研究科（博士論文要旨および審査要旨は『一橋論叢』第94巻 3 号所収）

D. 学術論文

1972年 7 月	「ヤルタ外交からトルーマン・ドクトリンへ」油井ほか『歴史学研究』第386号
1972年 8 月	「武器貸与政策と反ファシズム連合の形成」『歴史学研究』第387号
1974年12月	「帝国主義世界体制の再編と冷戦の起源」『歴史学研究』別冊
1975年 9 月	「英米石油協定交渉と中近東」『駿台史学』第37号
1977年 9 月	「アメリカの中近東政策」『中東総合研究』第 9 号
1977年12月	「マーシャル・プランと地域統合」『駿台史学』第42号
1978年 8 月	「成立期アメリカ帝国主義論争における政治史と経済史の接点」『アメリカ史研究』第 1 号
1980年 8 月	「帝国論の論理と思想」『アメリカ史研究』第 3 号
1981年 3 月	「解放ギリシアの暗転とアメリカ合衆国」『駿台史学』第51号
1982年 5 月	「中心・周辺関係の再編とトルーマン・ドクトリン」『国際政治』第70号
1982年 6 月	「戦後初期の合衆国社会と対外干渉」『一橋論叢』第88巻 1 号
1984年 4 月	「内戦期ギリシアの政党政治と軍部」『地中海論集』第 9 号
1987年 4 月	“Democracy from the Ruin,” *Hitotsubashi Journal of Social Studies* 19, no. 1
1987年10月	「敗戦と帝国意識―その連続と変容の比較史的検討」『歴史学研究』増刊号
1989年 8 月	「転換期の世界と米国史像の再検討」『アメリカ史研究』第12号
1991年 4 月	「新しい世界史学への誘い」『一橋論叢』第105号 4 巻
1992年12月	“From Exclusion to Integration: Asian Americans’ Experiences in World War II,” *Hitotsubashi Journal of Social Studies* 24, no. 2
1993年12月	“From Exclusion to Integration: Search for Postwar Hegemony and Repeal of the Oriental Exclusion Act,” *Hitotsubashi Journal of Social*

Studies 25, no. 2

1995年 4－6 月　"Between Pearl Harbor and Hiroshima/Nagasaki," *Bulletin of Concerned Asian Scholars* 27, no. 2

1996年　「戦争体験と日米文化摩擦」『アメリカン・スタディーズ』第 1 号、東京大学アメリカ研究資料センター

2001年 9 月　「反米と現状肯定の奇妙な結合」『歴史読本』別冊

2002年 2 月　「戦争の記憶とアメリカニズム」『歴史と地理』第551号

2002年 5 月　「現代史としてのベトナム戦争」『国際政治』第130号

2002年11月　「アメリカ知識人と愛国主義のわな」『現代思想』第30巻12号

2002年12月　「アメリカニズムと文明の溝」『比較文明』第18号

2003年 3 月　「日米関係と戦争の記憶」『聖学院大学総合研究所紀要』第26号別冊

2003年 7 月　「アメリカの世紀と帝国の間」『アメリカ史研究』第26号

2006年 3 月　「グローバリゼーション時代の地域研究」『Odysseus（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）』第10号

2006年 3 月　"The Changing Patterns of Trans-Pacific Migration: Its Past and Present,"『アメリカ太平洋研究』第 5 号

E. 評論・研究動向・史料紹介など

1973年 2 月　「現代史部会報告批判」『歴史学研究』第393号

1976年 5 月　「ファシズム成立の国際的契機」『歴史学研究』第432号

1978年 8 月　「成立期アメリカ帝国主義論争」『アメリカ史研究』第 1 号

1979年　「アメリカ国際政治史」『国際政治』第61号・62号

1979年 1 月　「戦後世界史研究の課題と視角」『歴史学研究』第464号

1979年 2 月　「国際シンポジアム核軍拡の起源と現状に参加して」『歴史学研究』第465号

1980年　木畑洋一、油井大三郎「国際関係」国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状Ⅴ』東京大学出版会

1981年 3 月　「第15回国際歴史学会議と平和の問題」『平和研究（創価大学）』第 2 号

1982年 5 月　「ギリシアのアラギ」『歴史評論』第385号

1983年 3 月　「日本における戦後初期のアメリカ合衆国史に関する研究動向と問題点」『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第 5 号

1982年11月　大会趣旨説明「民衆の生活・文化と変革主体」『歴史学研究』別冊

1983年 5 月　大会企画趣旨「東アジア世界の再編と民衆意識」『歴史学研究』第516号

1989年 4 月　「太平洋地域主義者の苦闘」『UP』第198号

1989年 5 月　「北アメリカ・1988年の歴史学会・回顧と展望」『史学雑誌』第98巻 5 号

1990年 1 月　「主体的世界史学の形成―戦前期における江口史学の思想形成を中心

に」『歴史学研究』第602号（後に『思索する歴史家』に収録）
1990年11月　「IPR 大窪コレクション」一橋大学図書館『鐘』第23号
1991年12月　「ポスト・パール・ハーバーの歴史心理」『世界』第562号（朝日、日経の論壇で言及）
1992年 8 月　「今、なぜ日本の戦争責任を問い直すのか」『歴史評論』第508号
1993年 2 月　「失われた和解のチャンス」および須之部量三と対談『世界』第578号（韓国『基督教思想』に翻訳転載）
1994年 2 月　「戦争責任の日米ギャップをどう考えるか」『世界』第591号
1995年 8 月　「アメリカ史研究会の20年とこれから」『アメリカ史研究』第18号
1996年　「米国の文書館事情」『現代史研究』第42号
1999年 9 月　「人種の溝と文明の壁」『思想』第903号
2001年 6 月　「変貌する太平洋世界へのアプローチ」『歴史学研究』第750号、特集「第19回オスロ国際歴史学会議」
2002年 2 月　「同時多発テロ事件とパール・ハーバーの記憶」『世界』第698号
2002年 1 月　「パール・ハーバー60周年と日米ギャップ」『環』特集「日米関係再考」
2003年 2 月　座談会、李鐘元、油井大三郎、酒井啓子、高原明生、内藤正典、臼杵陽「9.11以降、世界は変わったのか―地域研究の視点」国立民族学博物館地域研究企画交流センター『地域研究論集』第 5 巻 1 号
2004年 5 月　「デモクラティック・ピース論の落とし穴」『一橋情報』
2004年 8 月　「戦後日本のアメリカニゼーション」『週刊朝日・日本の歴史』

F. 翻訳書

1973年10月　翻訳・解説「リベラル知識人と人民戦線」新川健三郎編『大恐慌とニューディール』平凡社
1981年11月　翻訳・解説「マーシャル・プラン」アメリカ学会編『原典アメリカ史』第 6 巻、岩波書店
1982年 1 月　翻訳・解説「中東政策の展開」アメリカ学会編『原典アメリカ史』第 7 巻、岩波書店
1982年　ハワード・ジン、『民衆のアメリカ史』下、TBS ブリタニカ（後に明石書店より 2 巻本で刊行）

G. 短評、書評など

1972年 2 月　「第二次世界大戦とアメリカ国家の再編」『国際関係論研究会会報』第24号
1972年 7 月　「現代史部会に参加して」『歴史学研究月報』第151号
1975年 8 月　書評論文（共同執筆）清水知久・高橋章・富田虎男『アメリカ史研究入門』山川出版社
1975年12月　「天皇訪米とディプロアという落とし穴」『歴史学研究月報』第192号

1976年 8 月28日　「税務当局の甘さに不信」『朝日新聞』声欄
1977年 1 月　「教育の論理と経営の論理」『明治大学教職員組合ニュース』
1977年 2 月　「民族と国家―その世界史的検討」『歴史学研究月報』第206号
1977年10月　「世界のヒバクシャ団結せよ！」『歴史学研究月報』第214号
1978年12月　「戦後史を暗黒に描くもの」『歴史学研究月報』第228号
1979年 6 月　「ある革命的歴史家の死」『未来』第153号
1981年 9 月　「総合部会例会の日常化について」『歴史学研究月報』第261号
1982年 3 月　「民衆の生活・文化と変革主体」『歴史学研究月報』第267号
1983年 2 月　「東アジア世界の再編と民衆意識」『歴史学研究月報』第278号
1983年 5 月　「東アジア世界の再編と民衆意識」（全体会企画説明）『歴史学研究』第516号
1983年 5 月　「1982年度総合部会活動報告」『歴史学研究月報』第281号
1983年 8 月16, 23日「はやる近未来予測」『エコノミスト』第61巻33号
1983年12月20日　「グレナダ侵攻―試されるマスコミの眼」『エコノミスト』第61巻53号
1985年 5 月　「アメリカ歴史学会（AHA）百周年大会参加記」『アメリカ学会会報』第77号
1985年 9 月24日　「原爆投下40年―アメリカの夏」『エコノミスト』第63巻41号
1986年 9 月21日　「南ア進出企業に投資するな―米国におけるアパルトヘイト反対運動の広がり」『エコノミスト』第64巻40号
1988年11月　「社会学部主催国際シンポジウム」『如水会会報』第703号
1989年 3 月 2 日夕刊「転換期の世界と文化の重要性」『朝日新聞』
1989年 5 月　板垣雄三、二宮宏之、油井大三郎ほか座談会「歴史学のいま」『UP』第200号
1989年 5 月　「北アメリカ」（回顧と展望）『史学雑誌』第98巻 5 号
1989年10-11月　「座談会・新しい世界史全12巻完結にあたって」『UP』第205-206号
1989年11月　「比較占領史研究の課題と方法」『歴史学研究』第600号
1990年 2 月　「韓国アメリカ学会主催国際セミナー参加記」『アメリカ学会会報』第96号
1990年 3 月　書評「戦後日本史と戦後世界史をどう繋ぐか」『歴史学研究』第604号
1990年 5 月15日　書評、五百旗頭真『日米戦争と戦後日本』『エコノミスト』第68巻20号
1990年11月26日　「第 2 回アジア・太平洋賞特集」『毎日新聞』
1991年 3 月 5 日　書評、陸井三郎『ハリウッドとマッカーシイズム』、『エコノミスト』
1991年 3 月　「部会 A・外国の革命とアメリカの対応・報告要旨」『アメリカ研究』第25号
1991年 5 月　「パール・ハーバー50年に想う」『アジア時報』
1991年 1 月15日　書評、新川健三郎、長沼秀世『アメリカ現代史』、『エコノミスト』第69巻 2 号
1991年11月29日　「開戦50周年に反省の表明を」『朝日新聞』（後に英訳）
1991年12月12日　「アジア太平洋戦争開戦50周年を迎えて」『Top Management Service

	（三菱総研）』第20巻-25号
1992年１月28日	対談、佐々木毅、油井大三郎「誤算だらけのブッシュ訪問」『エコノミスト』第70巻４号
1992年３月３日	『朝日』「ひと」欄で戦争責任・戦後補償問題研究会代表として紹介
1992年３月11日	『共同通信』配信で、中国新聞、北海タイムズ等の「ひと」欄で紹介
1992年５月５日	「戦後補償、敗戦50年に実現を」『日中友好新聞』
1992年10月27日	「コロンブスの亡霊」『エコノミスト』第70巻45号
1992年11月24日	「クリントンとケネディ」『エコノミスト』第70巻50号
1992年12月22日	「日本人の名誉にかかわる問題」『エコノミスト』第70巻54号（英訳され、Japan Views、1993年２月号に掲載）
1993年１月26日	「マーストリヒトの多難な挑戦」『エコノミスト』第71巻４号
1993年２月23日	「イサム・ノグチの手紙」『エコノミスト』第71巻９号
1993年３月23日	「いま、なぜマルコムＸなのか」『エコノミスト』第71巻13号
1993年４月３日	「戦後補償と世界史教育」『一橋情報』
1993年４月20日	「新一世と海外駐在員の間」『エコノミスト』第71巻18号
1993年４月	書評、豊下楢彦『日本占領管理体制の成立』『国際政治』第103号
1993年５月	「北アメリカ・20世紀」『史学雑誌』第102編５号
1993年５月25日	「ベトナム帰還兵の心の旅路」『エコノミスト』第71巻23号
1993年６月22日	「外からの変革の難しさ」『エコノミスト』第71巻27号
1993年７月20日	「アメリカ社会と銃依存症」『エコノミスト』第71巻31号
1993年８月21日	「誰のための平和祈念館か」『エコノミスト』第71巻37号
1993年９月21日	「細川発言の波及」『エコノミスト』第71巻40号
1993年12月	「細川発言と戦争体験の見直し」『歴史読本』
1993年	「自分史の中のサークル活動」『一橋スポーツ』第24号
1994年４月	「最近の学生意識と大学改革」『如水会会報』第768号
1994年５月	「占領史の国際比較研究の発展を求めて」『占領史通信』
1995年１月19日	書評、ショーンバーガー『占領』、『日本経済新聞』
1995年１月28日	『共同通信』配信「希望・1945年から」『北陸新聞』ほか地方紙に掲載
1995年２月19日	Interview on the 50th Anniversary of the End of W.W.II by the Boston Globe
1996年９月	「スミソニアン原爆展示論争と国境の壁」『証言1996―ヒロシマ・ナガサキの声』第10集
1996年10月９日	「私の履歴書」『東京大学教養学部報』第405号
1997年３月	「いま、米国を学ぶことの重さを思う」『うずしお』第30号（東京大学教養学部アメリカ科学生誌）
1997年４月	対談、M. ハーウィット、油井大三郎「スミソニアン原爆展示は何故阻止されたか」『世界』第633号
1997年４月	「東大教師が新入生にすすめる本」『UP』第294号（後に文春新書に収録）
1997年４月	「史資料の日米ギャップを考える」『アメリカ学会会報』第125号

1997年12月2日　「アファーマティヴ・アクションの行方」『中国新聞』ほか。
1998年3月　「新川健三郎先生を送る」『Odysseus』第2号
1998年3月　「アメリカ史の新地平・編集にあたって」『アメリカン・スタディーズ（東京大学アメリカ研究資料センター）』第3号
1998年5月19日　「ひと」『東京大学新聞』
1998年7月　書評、木畑洋一『帝国のたそがれ』、『歴史評論』第579号
1998年夏　"American Studies and Cultural Fusion between East and West," The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology 4
1998年9月　「『アメリカニゼーションの国際比較』研究会の発足」『アメリカ研究資料センター CAS　Newsletter』第2巻1号
1999年6月　「西洋現代」（回顧と展望）『史学雑誌』第108巻5号
1999年7月30日　「憂慮するアジア研究会誌 CCAS の30年」『週刊金曜日』第277号
1999年8月　書評、斉藤孝編『20世紀政治史の諸問題』、『歴史学研究』第726号
1999年8月3日　「日本人の戦争観」『東京大学新聞』
1999年9月　「アジア太平洋時代の米国研究」『CAS　Newsletter』第3巻1号
2000年4月　書評、高橋章『アメリカ帝国主義成立史の研究』『歴史評論』第600号
2001年3月　「『間文明研究』としてのアメリカ太平洋研究の可能性」、「改組までの経緯」、『アメリカ太平洋地域研究センター CPAS　Newsletter』第1巻1号
2001年7月17日　「アメリカの多文化主義」『東京大学新聞』
2001年8月　「あまりにも早すぎる旅立ちに想う」『自由の風』第3号
2001年9月15日朝刊　「9.11同時多発テロ事件コメント」『毎日新聞』
2001年11月　「同時多発テロ事件の衝撃」『アメリカ学会会報』第143号
2002年1月　「米国同時多発テロを考えるための読書案内・アメリカからの視点」『通販生活』2002年春号
2002年3月3日　書評、アンドリュー・ゴードン編『歴史としての戦後日本』みすず書房、『東京新聞』
2002年3月　書評、ガブリエル・コルコ『ベトナム戦争全史』社会思想社、『アジア・アフリカ研究』第41巻4号
2002年12月　座談会「人民闘争史研究と現在の歴史学」歴史学研究会創立70周年記念『戦後歴史学を検証する』青木書店
2002年12月　"Yuji Ichioka's Days at the University of Tokyo and His Legacy," *Amerasia Journal*
2002年12月　書評、片田さおり『グローバル・アクターの条件』『書斎の窓』第520号
2003年3月　「ユージ・イチオカ氏を偲ぶ」『CPAS　Newsletter』第3巻2号
2003年6月13日　書評、K. ブース、T. ダン編『衝突を超えて』日本経済評論社、『週刊読書人』
2003年10月　「歴史学研究会現代史部会ヴェトナム戦争と東アジアの社会変容」コメント、『歴史学研究』増刊号

2003年７月２日　「エスカレートする対テロ戦争とアメリカ知識人」『東京大学教養学部報』第467号
2003年10月　書評、古矢旬『アメリカニズム』、『リヴァイアサン』第33号
2004年１月14日　書評、木畑洋一ほか『戦争の記憶と捕虜問題』『東京大学教養学部報』第471号
2004年３月　「山本吉宣先生を送る」『CPAS　Newsletter』第４巻２号
2004年10月13日　「彼理（ぺるり）と Perry（ペリー）―交錯する黒船像―展によせて」『東京大学教養学部報』第477号
2005年１月　対談中村政則・油井大三郎「戦後60年―どんな転換点なのか」『世界』第735号
2005年３月19日　「現実主義外交の提唱者（ジョージ・ケナン追悼）」『日本経済新聞』
2005年３月　「彼理（ぺるり）と Perry（ペリー」展とこれからの CPAS」『CPAS Newsletter』第５巻２号
2006年１月11日　「太平洋共同体は可能か」『東京大学教養学部報』第489号
2006年２月１日　「二つの10年」『東京大学教養学部報』第490号

H.　国際学会報告・コメント

1985年12月11日　“The Origins of the Reverse Course in the American Occupation of Japan,” Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley, USA
1986年４月30日　“Democracy from the Ruins: The First Seven Weeks of the Occupation in Japan,” Center for Japanese Studies, University of California, Berkeley, USA
1991年３月30日　Comment on the Cold War Culture at the Annual Conference of the Japanese Association of American Studies in Nagoya, Japan
1992年９月９日　“From Exclusion to Integration: Asian Americans’ Experiences in World War II,” NIRA Conference on Ethnicity in Seattle, USA
1993年７月17日　“From Exclusion to Integration: Search for Postwar Hegemony and Repeal of the Oriental Exclusion Acts,” NIRA Conference on Ethnicity in Tokyo, Japan
1995年６月４日　“Between Pearl Harbor and Hiroshima/Nagasaki” at the Annual Conference of the Japanese Association of American Studies in Sendai, Japan
1995年８月24日　Comment on Professor Tucker’s Paper in Ito, Shizuoka
1995年10月14-17日　“Fifty Years after Surrender: Japan and her Position in the World,” Japan Seminar, Heidelberg University, Germany
1995年11月９日　“Act of Peace,” Annual Conference of American Studies Association, Pittsburgh, USA
1995年12月２日　“Between Pearl Harbor and Hiroshima/Nagasaki,” Midwest Japan

Seminar, Kalamazoo College, USA

1996年1月18日 "Between Pearl Harbor and Hiroshima/Nagasaki," East Asian Center, Stanford University, USA

1996年7月29-31日 "Cultural Gaps in the Memories of Asia Pacific War between Japan and the U.S.A.," Institute for American Studies, Chinese Academy of Social Sciences, China

2000年5月13日 Comment on Professor Thomas McCormick's Paper on "American Hegemony and the Rhythm of Modern History,1914-2000" at the Annual Conference of Japanese Association of Western History in Osaka, Japan (in Japanese)

2000年8月10日 "Organizer's Remark on the Changing Approaches to the Pacific World," The 19th International Congress of Historical Sciences in Oslo, Norway

2000年9月30日 "The Present and Future of Pacific Regional Studies," International Symposium on The United States and the Asia Pacific in the 21st Century: From Friction to Coexistence in Tokyo, Japan (in Japanese)

2002年9月7日 "American Images of Asia and Civilizational Gaps: Between December 7 and September 11," International Symposium on Possibilities of Intercivilizational Dialogues between the Asia Pacific Region and the United States: War Memories and Lessons of 9/11, Center for Pacific and American Studies, the University of Tokyo.

2005年9月3日 "The Changing Patterns of Trans—Pacific Migration: Its Past and Present" at the International Symposium on the World of transnational Asian Americans, Center for Pacific and American Studies, the University of Tokyo

2005年10月30日 Roundtable on East Asian Network of American Studies, The 40th Anniversary Conference of American Studies in Kyonju, Korea

I. 国内学会報告等

1971年8月 アメリカ若手研究会現代史グループ、「ヤルタ外交からトルーマン・ドクトリンへ」現代史サマーセミナー

1973年5月 「第二次世界大戦とアメリカにおけるグローバリズムの確立」日本西洋史学会第23回大会

1974年5月 「帝国主義世界体制の再編と冷戦の起源」、歴史学研究会年次大会、現代史部会

1975年12月 「合衆国における地域研究と地域概念の史的検討」駿台史学会年次大会

1979年8月 「帝国論と帝国主義論」アメリカ史研究者夏季セミナー

1981年10月 「アメリカにおける帝国主義の成立と資本・賃労働の国際移動」土地制度史学会秋期学術大会

1986年12月20日	『戦後世界秩序の形成』合評会（評者：有賀貞、林義勝）アメリカ史研究会
1987年５月	「敗戦と帝国意識―その連続と変容の比較史的考察」歴史学研究会年次大会全体会報告
1989年５月13日	『未完の占領改革』合評会（安原洋子・山際晃・袖井林二郎評）占領史研究会
1989年８月	「ベトナム戦争と戦後意識」現代史サマーセミナー
1989年10月14日	『未完の占領改革』合評会（林義勝・片桐庸夫評）、アメリカ史研究会
1992年11月13日	「戦後補償問題」国会図書館調査・立法考査局調査業務研修
1994年６月４日	「戦争体験と日米文化摩擦」公開シンポジウム「亜米利加＝NIPPON―日米共生パラダイム」東京大学アメリカ研究資料センター
1994年７月15日	シンポジウム「アメリカ史研究会の20年」でパネリストの１人として発言
1994年10月23日	「脱近代の起点としての第二次世界大戦」国際政治学会秋期大会シンポジュウム報告（東京大学法学部）
1994年12月10日	「米国におけるアジア系移民差別法の廃止過程とその歴史的意味」日本移民学会大会
1995年６月10日	「戦後50年と日米関係」歴研アカデミー講演会
1995年６月21日	「パール・ハーバーとヒロシマ・ナガサキの間」早稲田大学社会科学研究所創立55周年記念シンポジウム
1995年７月15日	アメリカ史研究会創立20周年記念シンポ報告
1995年８月４日	「戦争の記憶とエスノ・セントリズム」現代史サマーセミナー
1996年６月８日	「アメリカニズムと日本イメージの変遷」東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻公開シンポジウム「アジア太平洋の歴史イメージ」
2000年10月28日	公開シンポジウム「欧州統合と21世紀の東アジア―未来への提言」でコメント、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、ドイツ・ヨーロッパ研究室共催
2000年12月	一橋大学社会学部国際シンポジウム「20世紀―その夢と現実」でコメント
2001年３月	「国重先生への送別と感謝にかえて」『うずしお』第32号
2001年６月26日	「アメリカの中のアジア」静岡英和女学院短期大学公開講演（『静岡新聞』2001年６月28日号で報道）
2001年10月２日	「米国太平洋変動研究のめざすもの」東京大学社会科学研究所・アメリカ太平洋地域研究センター合同会議
2001年11月18日	「歴史教科書とナショナリズム―日米関係の文脈から」日本平和学会報告（立命館大学）
2001年12月８日	「米国の戦争体験とパブリック・メモリー」アメリカ史研究会報告
2002年４月20日	「文明の抗争から共生へ―21世紀への提言」立教大学総合研究センター設立記念シンポジウムで報告

2002年4月27日　シンポジウム「ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』をどう読むか」で報告、東京外国語大学海外事情研究所
2002年6月21日　「アメリカのナショナル・アイデンティティと戦争の記憶」立命館大学国際言語文化研究所
2002年6月29日　「日米関係と戦争の記憶」公開シンポジウム「戦後日米関係の回顧と将来の展望」で報告、聖学院大学総合研究所
2002年12月8日　「覇権国アメリカの戦争観と日米関係」同時代史学会創立大会報告
2003年5月25日　歴史学研究会現代史部会「ヴェトナム戦争と東アジアの社会変容」でコメント
2003年6月1日　アメリカ学会年次大会「日本のアメリカ研究の課題」でコメント
2003年10月17日　日本国際政治学会年次大会「冷戦史の再検討」でコメント、筑波大学
2004年6月6日　アメリカ学会年次大会「日米関係150年」でコメント
2004年9月14日　「グローバリゼーション時代の地域研究」日本学術会議地域学専門委員会主催シンポジウム「地域学をこえて―知のフロンティアと国際共同研究」
2004年12月17日　「学会と地域研究」地域研究コンソーシャムでコメント
2005年7月2日　「戦後日本の大衆消費社会」同時代史学会第10回研究会でコメント
2005年9月24日　「第二次世界大戦の記憶とその日米ギャップ」福岡大学七隈史学会年次大会公開講演
2005年11月5日　「アメリカからの提言」公開シンポジウム「和解のための歴史を求めて―ヨーロッパとアジア」でコメント、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻など

J. 市民講座など

1987年11月27日　「敗戦と民族意識の変容」埼玉県高等学校社会科教育研究会
1988年7月28日　「米国の占領改革とその歴史的意味」神奈川県立教育センター
1988年10月29日　「戦後史の中のE. H. ノーマン」くにたち中央図書館
1989年9月22日　「朝鮮戦争とサンフランシスコ平和条約」中野区民大学「昭和史をふりかえる」
1989年11月22日　「日米関係の源流をさぐる―太平洋問題調査会の歴史的意味」如水経済懇談会
1989年11月23日　「占領改革と天皇制」國學院大學歴史学研究会学園祭講演
1990年6月8日　「アメリカの外交―冷戦とアメリカ」朝日カルチャーセンター
1990年6月15日　「アメリカの外交―貿易自由化とアメリカ」朝日カルチャーセンター
1990年10月8日　「日米経済摩擦の歴史心理」明治大学人文研究所公開講座「曖昧」
1990年12月14-16日　「冷戦の起源と中東」大学「セミナーハウス第10回大学院共同セミナー「現代戦後史の構造」
1991年11月4日　「湾岸戦争と太平洋戦争の間」桜美林大学国際学会
1991年11月2日　「近代市民社会とマイノリティ」県立かながわ女性センター

1991年11月25-27日「世界秩序とアメリカのディレンマ」第18回国際学生セミナー「湾岸戦争の問いかけるもの」大学セミナーハウス
1991年11月29日　「占領体験と戦後の日米関係」神奈川県立教育センター
1991年12月７日　開戦50年を考える市民の集い、日本教育会館
1992年３月21日　「国際先住民年と社会的少数者」神奈川県女性センター
1992年５月７日　「戦前期の日米関係と太平洋地域主義の挫折」東京大学教養学部総合コース
1992年10月26日　「語りつぐ戦争」東税支部婦人部
1992年11月　「転換期の世界と過去に目を閉ざす日本」日本ジャーナリスト会議第三回セミナー『ジャーナリスト』1993年１月25日号に掲載
1992年８月22日　日本母親大会「語り継ぐ戦争」分科会助言者
1993年９月20日　「三つの戦後とこれからの日本」足利市民大学「戦争と人間」
1993年10月18日　「転換期の世界と日本の役割」全国地方銀行協会第188回銀行講座
1994年１月24日　「最近の学生意識と大学改革」如水会定例晩餐会講演（『如水会会報』1994年４月号に掲載）
1995年２月１日　「戦争責任の日米ギャップ」日本の戦争責任資料センター連続講演,『季刊戦争責任研究』第７号、1995年春季号に収録
1995年６月27日　「日米の戦後50年―戦争観の日米ギャップを中心に」共同通信加盟社論説研究会講演
1995年７月１日　「日米・戦争イメージのギャップについて」コープ神奈川
1995年８月15日　戦後補償市民ネットワーク主催の集会で報告
1996年４月25日　「日本人の戦争観」人事院課長補佐級行政講習会
1996年11月30-31日　公開シンポジウム「東京裁判を考える」でコメント、神奈川近現代史フォーラム実行委員会
1997年５月28日　「アメリカの社会と文化」人事院初任行政研修
1997年10月24-26日「戦争は不可避か」第175回大学共同セミナー「地球市民になろう」
1998年６月11日　「戦争の記憶とアメリカのナショナリズム」横浜市立大学リカレント講座
1998年７月22日　「世界史のなかの戦争と平和」神奈川県立教育センター
1999年２月16日　「スミソニアンの原爆展示論争とその背景」聾史研究横浜団研究会
1999年６月14日　「アメリカ文化と戦争の記憶」人事院初任者研修
1999年６月18日　「米・西・キューバ・フィリピン戦争の再訪」PARC 自由学校
1999年６月25日　「アメリカと二つの世界大戦、冷戦と世界戦略の展開」PARC 自由学校
2000年７月４日　「アメリカン・デモクラシーの夢と現実」東京大学教養学部テーマ講義「民主主義」
2002年６月７日　「米国の外交戦略」PARC 自由学校「いま、アメリカを論じる」
2002年６月８日　「戦後日米関係再考」神奈川大学市民講座「戦後史を読み直す」
2002年６月12日　「サンフランシスコ条約―日本とアメリカの思惑」PARC 自由学校
2002年10月６日　「今、アメリカを考える」「自由の風」の会

2003年1月28日　「日米戦争について」かわさき市民アカデミー「日本歴史の争点」
2003年1月25日　「テロ後の日米関係―アメリカ外交の文脈から」朝日カルチャーセンター
2003年10月7日　「アメリカ外交とアメリカニズム」朝日カルチャーセンター「アメリカで知る20世紀」
2003年11月14日　「日米関係の現在と未来」東京大学社会連携・高大連携プログラム「21世紀を生きるための知」
2003年11月11日　「第二次世界大戦から冷戦期の再検討」朝日カルチャーセンター「アメリカで知る20世紀」
2004年2月3日　「ポスト冷戦とグローバリゼーション」朝日カルチャーセンター「アメリカで知る20世紀」
2004年4月26日、5月10日　「グローバリゼーションとアメリカニゼーションのあいだ」東京大学教養学部総合コース「国際化時代の政治と文化―アメリカのゆくえ」
2004年10月30日　「日米同盟再考」朝日カルチャーセンター
2004年12月8日　「グローバリゼーション時代の国際地域文化研究」南山大学大学院国際地域文化研究科公開講演
2005年1月28日　「日米関係の現在と未来」東京大学社会連携・高大連携プログラム
2005年6月7日　「記憶と史料の対抗―アメリカにおける戦争体験の研究」東京大学教養学部テーマ講義「史料論」
2005年6月18日　「アメリカから見たアジア太平洋戦争」神奈川大学市民講座「昭和史を考える」

K. テレビ・ラジオ出演

1991年12月7日　Interview by National Public Radio
1992年4月13日　「戦後補償についての解説」NHK国際放送（8分間、関心高く日英語以外の20言語で放送）
1993年2月23日　シリーズ「歴史でみる日本」中の占領期について、NHK教育TV
2000年度　シリーズ「歴史でみる世界」NHK教育TV
11.13「米西戦争と大国への道」
12.18「ヘンリー・フォードの栄光と挫折」
2001.1.15「マーシャルとシューマン」
2.19「レイチェル・カーソンの警告」
2001年度　シリーズ「歴史でみる世界」NHK教育TV
11.5「近代デモクラシーの誕生」
11.26「米西戦争と大国への道」
2002.1.14「エジソンの夢」
1.29「ケネディの選択」
2002年度　シリーズ「歴史でみる世界」NHK教育TV
10.22「アメリカ・フランス―二つの革命」

11.4「リンカーンとダグラス」
2003.1.6「エジソンの夢」
1.13「ローズヴェルトの夢と現実」
1.20「ケネディの選択」
2.24「グローバル化と地域統合の時代」

2003年度　シリーズ「歴史でみる世界」NHK 教育 TV
10.27「アメリカ・フランス―二つの革命」
11.17「リンカーンとダグラス」
2004.1.12「電話とラジオの登場」
1.19「ローズヴェルトの夢と現実」
2.2「キング牧師の夢と現実」
3.1「グローバル化と地域統合の時代」
放送大学「アメリカの歴史」（4 回）以後継続放映
4.1 NHK スペシャル「イラク戦争―アメリカ・イラクの人々はいま」

2004年度　シリーズ「高校講座世界史」NHK 教育 TV
11.8「アメリカの独立とフランス革命」
2005.1.10「大衆消費社会の到来」
2.7「パクス・アメリカーナへの道」

2005年度　シリーズ「高校講座世界史」NHK 教育 TV
11.7「アメリカの独立とフランス革命」
2006.1.9「大衆消費社会の到来」
2.6「パクス・アメリカーナへの道」

L.　辞書・辞典・教科書など

1991年　「マーシャル・プラン」『国際教育事典』アルク
1992年　「オーエン・ラティモア」、「太平洋問題調査会」『日本史大事典』平凡社
1993年　『世界史Ａ』一橋出版
1997年　『世界史Ａ　新訂版』一橋出版
1997年　「F. D. ローズヴェルト」、「太平洋問題調査会」、「日系人強制収容」、「二世部隊」、「ヤルタ協定」、「戦争責任」、『日本歴史辞典』小学館
1999年　「戦争の歴史」、「ナショナル・アーカイヴス」、「無名戦士の墓」、「退役軍人」、「予備役」、「捕虜」、「軍事同盟」、「マーシャル・プラン」、「アイゼンハワー・ドクトリン」、「ウィルソン14カ条」、「パクス・アメリカーナ」、「封じ込め政策」、加藤友康編『歴史学事典』第 7 巻、戦争と外交、弘文堂
2000年　「第 1 次世界大戦」、「第二次世界大戦」、「鉄のカーテン」、「二重封じ込め政策」、「冷戦」、「冷戦の終焉」『政治学事典』弘文堂
2000年12月　「トルーマン・ドクトリンと冷戦の開始」富田虎男ほか編『アメリカ

の歴史を知るための60章』明石書店
2004年10月　「移民とディアスポラ」小田隆裕ほか編『事典現代のアメリカ』大修館
2005年12月　「アメリカ合衆国」猪口孝ほか編『国際政治事典』弘文堂